

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00289

研究課題名(和文) 書物の構成要素とジャンルの相関に関する分析書誌学的研究：「未来記」の変容を中心に

研究課題名(英文) Analytical bibliographical study on the correlation between book components and genres: Focusing on the transformation of the "Miraiki(Future Chronicles)".

研究代表者

鈴木 広光 (Suzuki, Hiromitsu)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：70226546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、テキストに物質的形態を与え、書物を構成する諸要素が、読者にどのようにジャンルを意識させ、読み方を規定していくのかを、明治10年代以降、日本で盛んに出版された「未来記」という書物群を経年的に観察することによって析出しようとするものである。本研究では、明治以降、日本で出版されたすべての「未来記」を調査し、このジャンルの書物が扱うトピックと、書物の形態の変遷の様相とを明らかにすることができた。また、「未来記」というジャンルが、江戸時代以来の既存の文芸を利用する技法や、新聞や雑誌など明治以降の新たなメディアと関係を結ぶ様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義は、テキストに物質的形態を与え、書物を構成する諸要素がどのように読者にジャンルを意識させ、読み方を規定しているのか、その機能のあり方を明らかにした点にある。その機能は、人々の期待や不安を掬い取り形象化するという働きを持ったり政治的プロパガンダの側面を前面に出したりという形で具現化している。メディアはしばしば人々が漠然と抱く未来への不安を予言的言説で煽ってきたが、現代においてもより広範な媒体でそれらが展開されている。メディアがどのような形態や文体によって、読者の意識を操作してきたのかを解明することは、現代における「未来記」的言説に対する批判的視座を定めるために有効な手段である。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to analyze how the various elements that give material form to the text and constitute the book make readers aware of the genre and define the way they read it by observing the "Miraiki" books that have been actively published in Japan since the Meiji period. This study investigates all "Miraiki" books published in Japan since the Meiji era, and clarifies the topics covered by this genre of books, as well as the evolution of their forms. It also revealed the ways in which the genre of "futai-ki" utilized traditional literature and art since the Edo period, as well as the ways in which it formed relationships with new media since the Meiji period, such as newspapers and magazines.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 分析書誌学 未来記 SF小説 政治小説 内地雑居 国会開設 翻訳

## 1. 研究開始当初の背景

本研究はこれまで研究代表者が推進してきた、江戸板本からの明治活版洋装本への物質的形態の変化の諸相、書物の形態変化とジャンルの編成・再編成との関係、版面様式の変容と新たな様式規範の標準化の過程、そしてそれらに伴う読書行為への影響などを総合的に解明するためのケース・スタディとして位置づけられるものである。このような問題設定は、印刷された書物およびその版面を構成する諸要素の社会的機能に注目し、テキストが読者に伝達される際に纏う物質的形態がどのようにして意味構築のプロセスに関与するかを重視する D・F・マッケンジーの分析書誌学（「テキストの社会史」）、ロジェ・シャルチエの「読書の社会史」などで提唱された。日本ではそれらが 1990 年代に個別に紹介されてきたが、書誌学、出版学、日本近代文学の分野で若干の言及があっただけで、理論の深化・精緻化も、対象を日本の出版物とした実証の成果もみるには至ってはいない。研究代表者はこの問題を理論と実証の両面から推進することで、書誌学、出版学、文学、言語学といった諸分野を統合した、総合的な書記コミュニケーション史を構築することを目指してきた。

そのためのケース・スタディの対象として「未来記」を選択したのは、研究代表者が本課題以前に、ディオスコリデス『2065年』の日本語訳『新未来記』（近藤真琴訳、明治11年）や末広鉄腸の『二十三年未来記』（明治19年）において、「未来記」というタイトルも含めて、パラテキスト的諸要素が発信者側によるテキストの意味解釈を統御し、一義的な読み方に導くような効力を発揮する言語行為的側面を有することを明らかにしていたからである。「未来記」に特徴的な注釈や評語、また序文や挿絵などはテキスト解釈のツールであるだけでなく、それ自体が意味解釈の対象であり、発信者の意図を離れて読者の知識や伝統的な規範意識がその解釈に投影される。ジャンルの形成・再編・変容・他への吸収は、発信者と受信者（読者）によるテキストの意味解釈への関与の仕方の結果（統御の成功によるジャンル形成と解釈のねじれによるジャンルの変容と他への吸収）であるが、この観点から導かれる、「コミュニケーション空間において、媒介としてのパラテキストや物理的諸要素がテキストの意味解釈にどのように機能しているのかを、発信者（供給者）と受信者（読者）の双方から検証する」ことを目的に本研究課題は開始された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、板本から活版洋装本への過渡期に盛んに出版されるようになった、近未来の政治、外交、戦争、文明を批判的、あるいは煽情的に語る新しい「未来記」を経年的に観察し、その物質的形態の変化の諸相、書物の形態変化とジャンルの編成・再編成との関係、版面様式の変容と新たな様式規範の標準化の過程、そしてそれらに伴う読書行為への影響などを実証的に解明しようとするものである。明治の「未来記」は従来、政治小説やSFの先駆のように扱われ、「未来記」そのものとして論じられることはなかった。一方、本研究は、政治、外交、近代科学の面で新規の主題を扱いながら、文体や書物を構成する諸要素については、中世以来の注釈としての「未来記」と江戸板本以来の造本様式といった伝統的スタイルを選択せざるを得なかった明治初期の「未来記」が、新たに導入された西欧式活版印刷術の技術的成熟と出版の制度化によって、その後ジャンルとしてどのように確立し、変容し、あるいは他の領域に吸収されていくのかを確認しようとするものである。

### 3. 研究の方法

- (1) 明治前半(1880年代)から昭和初期(1930年代)までの約50年間に刊行された、書名に「未来」「未来記」、あるいは「夢物語」を冠する出版物をすべてリスト・アップし、各出版物について装丁、レイアウト等の形態的特徴およびタイトル、序文、注釈、評語等のパラテキスト的諸要素に関する書誌的記述とテキストの構成を含めた文体的特徴についての記述を行うことにした。文体的特徴の記述は、江戸文芸、特に読本や滑稽本からの継承性と近代的文体への転回の観点を意識しながら行うことにした。
- (2) 「未来記」と主題を共有し、近未来の政治・外交・戦争・文明について警世を意図して批判的に論じる書物群も同様に調査対象に含めている。「未来記」を冠する出版物は従来、政治小説に含めて論じられたり分析されたりすることがあったが、タイトルにおける「未来記」の語の有無はパラテキストとしてジャンルの形成や編制に関与することが予想されたので、両者の差異に留意しつつ、記述と分析をすすめた。
- (3) 上記の調査・記述を踏まえ、分析と総合的な考察を行った。具体的には、出版物を物質的諸要素の構成体として捉え、その諸要素がどのようにテキストの意味解釈の統御や多様性に関与しているのかを、読書空間におけるコミュニケーション・モデルを想定しつつ解明した。中世以来の伝統を継承する「未来記」テキストは、タイトル、注釈、評語、序文などにより一義的な意味解釈に向かうように統御されて読者に提供されるが、それらの諸要素は、「未来記」を冠する書物の出版が盛んになり、語られる内容も判型も多様なものになることによって、機能が変容したり要素そのものがなくなったりする可能性がある。それらの様相を観察し、テキストの社会的機能の変容や「読まれ方」の具体的イメージの変容を描き出すことを目指した。

### 4. 研究成果

本研究課題の研究期間中の成果は下記の三点である。

- (1) 明治以降の近代の「未来記」について、書名に「未来」とあるものも含めてほとんど(確認できる限りすべてではあるが漏れがあるかもしれない)の刊行物の現物を収集、あるいは調査することができた。その結果、近代の「未来記」が扱うトピック、文体、書物の形態の関連性とその変遷を把握することができた。明治11年から19年頃までは、「未来」や「夢物語」を冠する「未来記」系書物は、その多くを翻訳書が占める。科学文明が発達した社会の様相をユートピア的に描いた小説がよく知られるが、他にロシア語論文からの翻訳地政学書『一島未来記』などがあり、ジャンルは様々である。これらは幕末の洋学系木版本の装丁を継ぐ近藤真琴の『新未来記』が和装本であることを除くといずれも、洋装で高級なクロス装のものもあり、活字組版や紙質などにも意を払った丁寧な作りの書物が多い。文体は「未来記」を啓蒙として読ませようとする場合には、読本の文体や様式を借りているが、学術的と判断して翻訳する場合には漢文訓読体が選択されている。近未来に関する言説を翻訳するにあたって、対象と目的の違いによって既存の文体や様式を選択し分けているということである。明治18、19年になると時局に応じて二つのトピックを扱う「未来記」が数多く出版される。ひとつは明治23年の国会開設まで5年を切り、その問題が明らかになってきたことを論じる「二十三年未来記」で、末広鉄腸ほかいくつかの類似タイトルのものが刊行された。ただし、その狂騒はほとんど明治19年、20年を以て終える。同時期に条約改正に伴う内地雑居が話題になり、坪

内逍遥の『内地雑居 未来之夢』、『内地雑居経済未来記』、『東京未来繫昌記』などが刊行された。逍遥の『未来之夢』が高級な和装本であるのを除くと、「二十三年未来記」（ただし、鉄腸の『二十三年未来記』翻刻本は簡易な仮製本）や内地雑居関係はいずれもボール表紙本で刊行されている。文体や様式は、江戸文芸以来の読本、滑稽本、繫昌記の形式を借りるものが見られ、鉄腸の『二十三年未来記』の論説部分を除くと文芸の様式を借りて「未来記」の言説を一般に広めようとする意図が認められる。しかし、明治20年にピークを迎えた「未来記」の出版は国会開設がいよいよ現実なものとなると行われなくなり、未来を語る出版物は一旦姿を消す。「未来記」が再び世に現れるのは明治28年で、日清戦争の行く末とその清国のその後を予言する服部誠一『支那未来記』である。これ以降、「未来記」は専ら戦争を題材とするジャンルとなる。『支那未来記』は日清戦争中の出版であるが、その後の日露戦争、日米開戦を扱う「未来記」が世に出回るのは、戦争前になる（日米開戦に至っては何十年も前から）。形態としては、雑誌の付録や新聞の号外を模した形態のものになり、新聞や雑誌など近代のメディアが戦争を契機に部数をのばしてきたことと軌を一にするように、戦争を娯楽として消費するような出版形態をとるようになるのである。当該の戦争よりも前に、戦争を煽るかのように出版されているのが特徴で、新聞紙上で国民を煽る語句を、通常の本文とは異なるサイズや太さの活字を用いて組むという方法を援用しているのも、その表れである。文体はいずれもジャーナリスティックな普通文であり、ここに至って「未来記」は江戸時代以来の複数のジャンルとこれに対応する文体を選択して借用するというあり方は無縁となった。近代日本の「未来記」は以上のような変遷を経ていることが明らかになった。この研究成果については現在、論文を執筆中であるが、その概要を一部、（3）の研究成果を論文化したものに反映させている。

（2）A・ロビダの未来小説『20世紀』（1883年）は、その日本語訳が明治18年から20年にかけて三種出版された。原書の刊行年に早くも富田兼次郎と酒巻邦助によって日本語訳され、『開巻驚奇 第二世紀未来誌』と題して明治十六年十二月に稲田佐兵衛によって出版された。この訳はロビダの原文に比較的忠実な翻訳であったが、原書の第一部第一章から第三章までの日本語訳を収めた一巻のみで中絶してしまふ。これに続くのは、明治十九年六月に大阪の岡本宝玉堂から出版された服部誠一の『世界進歩 第二世紀』で全訳である。この二つに次ぐのが蔭山広忠によって翻訳され、明治二十年六月に和田篤太郎の春陽堂から出版された『社会進化 世界未来記』である。服部訳は先行する『第二世紀未来誌』の語句、表現を大いに利用していることがうかがえる。しかし、原書との関係からいえば、抄訳であり、大胆な削除や改変のあとが見られる。また蔭山訳も一部、服部訳を参照して翻訳を行っているが、全訳出版は蔭山訳のほうが先行するので、反対に完成が遅れた服部訳が蔭山訳を参考にしている。服部訳、蔭山訳ともに抄訳であるが、いずれも抄出の仕方に特徴がある。ロビダの原書が力を入れて描く未来科学やファッションなどの風俗について、翻訳が困難であったという理由もあるかもしれないが、全く関心を示さずにばっさり削除し、法律や裁判、人々の交流による言語の混淆などに焦点を当てて、翻訳している。これらは日本の「未来記」の主題であった国会開設や帝国憲法発布、内地雑居などと通じるトピックであることから、当時の「未来記」流行を意識しての翻訳出版であったと考えられる。この研究成果の詳細は現在、論

文として執筆中であるが、服部訳については原文と対照してその抄訳の方法を明らかにしたことについて、(3)を論文化したものの中に一部、利用している。

(3) 内地雑居を扱う「未来記」である『内地雑居 未来の夢』、『社会小説 日本之未来』、『東京未来繁昌記』において主要なトピックとなった言語問題(日本語と外国語との関係)について考察した論文「内地雑居後における言語問題、あるいは明治二十年における未来語りの想像力」を公表した。この論文では、内地雑居にともない日本における公用語の未来がどのように編制されるのか、外国人とのコミュニケーションがどのように行われ、それが未来記テキストにどのように表現されているのかについて、上記の三つのテキストの言説を分析し、それぞれの特徴を析出した。そして、未来記の内地雑居の世界は現在を観察し、その延長線上に未来を見たり、未来に現在を投影したり、現在を反転させたりして想像されたものであることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木広光	4. 巻 50
2. 論文標題 内地雑居後における言語問題、あるいは明治二十年における未来語りの想像力	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 叙説	6. 最初と最後の頁 153-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------